

世界遺産登録に向けて

鶴子银山(11) 田中清六あなどるべからず・・・

慶長5(1600)年の初冬、渡海前の田中清六は、寺泊の菊屋新五郎を佐渡に送り、様子をさぐらせました。当時、上杉景勝の家臣で河村彦左衛門が代官頭として、椎野与市が鶴子代官として佐渡を治めていました。

新五郎が清六に語るところでは、彦左衛門は佐渡明け渡しに同意しているが、与市に謀反の意があり「たびたび常秀(清六)を殺すべし」と申し立てているとのこと。このため、与市は討ち取られてしまいました。

同年12月、佐渡に渡った清六は、彦左衛門を配下に置き、佐渡を治めます。これは、彦左衛門が佐渡の検地を行ったことと、越後村上の鉛を佐渡に安定供給させたことを、清六が評価したためでしょう。また、慶長6(1601)年、清六宛の家康朱印状に、「河村彦左衛門儀は赦免し、佐渡の仕置きを申し付けるべきものなり」と、清六の口添えがあったものと考えられます。

この年、清六は彦左衛門を伏見城に連れて行き、家康に拝謁させま

す。その時、「御次の座敷まで彦左衛門を出し、清六立ちながら、彦左衛門連れて参り候とて披露申し候」と、家康の威光を背景に、清六が権勢をふるっている様子を彦左衛門に見せ付けます。これに驚いた彦左衛門は佐渡に戻ると、「清六をあなどるなど人々に申し渡し候」と記録にあります。

その頃、出羽から越前にかけて多数の百姓らが、穿子として佐渡に押しかけていました。しかし、諸国の領主は実力で阻止することなく、越後では一人20貫目、能登や越中では一人5貫目の銭を徴収し、百姓らの渡海を認めざるを得ませんでした。おそらく、清六の力の背景を忖度した結果なのかもしれません。

◆市役所産業観光部世界遺産推進課
☎63-5136



神山上に建てる白山五十里の根根澤ともされる跡館の清六田中社。望海根澤一帯を一望できる舌状台地帯に

地域おこし協力隊の活動を紹介します



佐和田地区 商店街担当
さいとう 齊藤 ちさと 千里さん

協力隊の任期は3年。あつという間に最後の一年を迎えてしまいました。

自分でも気づかないうちに佐渡の生活が日常となり、あいさつを交わす人が増え、地域と繋がりを持つて活動を行えるようになったことは、私の中でとても大きな変化だと感じています。

佐渡に来たばかりの頃の私が一番大変だと感じたのは、「地域と繋がりを持つて活動をする」ということ。地域と繋がりを持つということとは、自分一人が考えていることを好き勝手に動くのではなく、「地域が何をしたいのか」「どんなことならできるのか」「誰と協力していくか」といった地域に溶け込み、状況を把握することから始めないといけません。家族も友人もいない中、佐渡に来た私にとっては、状況を把握する唯一の方法は、地域に飛び込むこと

でした。

毎日「はじめまして」の日々が続き、正直しんどいなと思うこともありましたが、回数を重ねるごとに、「はじめまして」が、「また会ったね」「元気にしてるかい」と変わり、私も地域の人がどんな人で、どんな考えを持っているのか少しずつ分かってきました。

そんなことを続けていると、活動地域の中学校の先生と出会う機会があり、その先生は、生徒たちに地域の課題について考える機会を設けたいという思いを持つていたことから、中学生×活動地域の商店街コラボレーション企画が始まりました。



中学生と作成した「商店街ガイドブック」

地域の学校や中学生と繋がれたことで、その結果、活動地域の商店街と中学生の間に橋をかける役として、協力することができ、協力隊という仕事をあらためて、理解することができた気がします。

◆市役所産業観光部地域振興課
地域振興係 ☎63-4152